

鹿児島大学医学部昭和 49 年卒の仲間達 — 卒後 52 年を迎えて —

鹿児島市 | 栗 博志

『悲しいことがあると開く皮の表紙
卒業写真のあの人はやさしい目をしてる…』

シンプルな歌詞とシンプルなメロディー。
何も考えずにボーッと聴き流していても、
遠い昔の淡く何か懐かしく、もの悲しい、
そして不安で、然し、夢と希望に満ちた時代をダイレクトに思い出させてくれる曲が
ユーミンの『卒業写真』である（図1）。



図1 「卒業写真」
「ユーミン・ブランド・パート3」より

私達の世代は、何でも写真に撮る世代ではなく、それ故、卒業写真に閉じ込められた時代の記憶は新鮮で大切なものとなる。

ただ、大学の卒業写真なるものは、私の手元には、見当たらなかった。

平成2年に、甲斐元朗君が残してくれた、『昭和49年鹿児島大学医学部卒業生名簿』によると、43年入学以前の先輩も含め、卒業生は86名、鹿児島出身者は17名（女性2名）であった（入学時は多分百余名）。

私達の時代は、二期校制で、鹿大は九州

地方で唯一の二期校で、県外からの学生が多く、鹿児島出身者と女性は極端に少なかった。

県外からの卒業生は、地元に戻るか、東京に出ていく者が大部分で、私のように、親のあとも継がず、鹿児島に居残った者は、例外的であった。

昨日、市医報の為に「ショパン」の事を書こうと思い、中学時代の卒業アルバムを捜し出し、開いてみると、思いがけず中に挟まれた4枚の、大学卒業後の写真がでてきた。

（ショパンと卒業アルバムの関連については、後日述べる事とする）

写真を眺めながら、今、私が同級生の名前だけでも書いておかねば、この中の誰も今後、書き残す事はないだろうと思い、この場を借りて書かせていただく事とした。

なお去年、令和7年の同窓会での、同級生なのに年長者を「さん」付けで呼ぶのをやめ、平等に呼び合おう、と言う兎玉君の意見が採用されたので、本稿では基本、呼び捨てとし、必要に応じ「君」「さん」付けとする。

図2は、2枚の写真を送ってくれた皆越眞一君の手紙である。

手紙から、この写真が平成18年2月19日の有馬直道君のお祝いの会での集合写真で、私達同級生が、彼に腕時計をプレゼントした事が分かる。

多くの人が集まり、盛大な会となっ

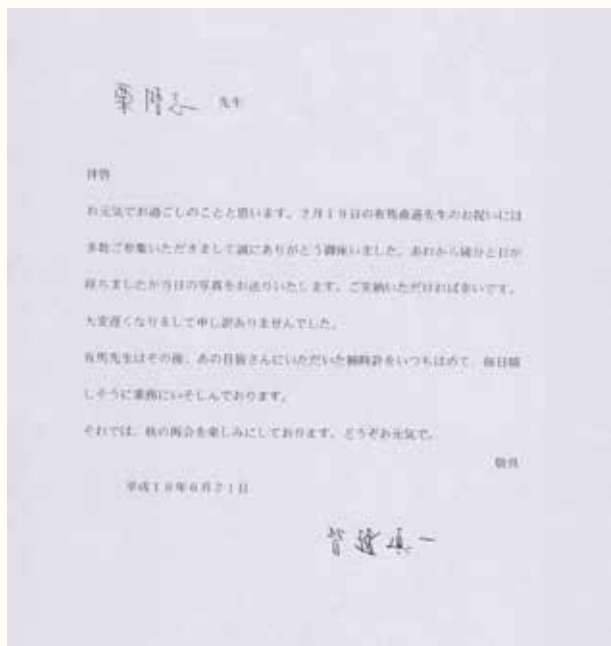


図2 有馬君の祝賀会
平成18年2月19日(20年前)

ている。写真は、今から20年前のもので、幸い全員が学生時代の面影を残しており、識別できると共に、刻まれた年輪が窺えるのが、また嬉しい(図3)。

更に大山君と中村さんが写っているのは、大変貴重である。

写真をじっと眺めていると、一人一人、全員の共に過ごした6年間の思い出が、頭の中に蘇ってくるが、紙面の都合で、最前列のみ、若干の思い出を綴る事とする。

最前列中央、薄い二枚重ねの座布団に鎮座しているのが、本会の主賓である有馬君である。彼の正座の姿勢と、顔の表情は、彼の性格を余す所なく示している。

有馬から左へ、最前列の話を進めよう。

一人目の白髪の優しそうな顔付きのおじさんが大山である。

彼は中央駅付近の酒屋のせがれで、遊びに行った時に、ショパンが上手に弾ける兄弟がいると言っていたのが、記憶に残る。

私は彼の事を「熊五郎」と呼んでいた。

昨今、熊は街中でも人を襲う野獣と化し、恐れられているが、当時流行ったアニメの「熊五郎」は、気は優しくて力持ちで、大山にピッタリだった。

その左、前田の前で踏ん反り返っているのが、田辺である。

私が鹿児島に来て、同級生の中にも頭のいい男がいるものだ、と感心したのがこの田辺と松岡だった(他にもいたかもしれない)。

当時の私達の娯楽は、映画、ダンス、ボーリングであり、少数派として麻雀、ビリヤードがあった(私の認識している限り)。

映画は100円の名画座とナポリ座(すぐ



図3 学生時代の面影を残す集合写真

に閉館)、それに有楽座があり度々通っていた。土曜日の夜は300円握って、数軒あったダンス・ホールに連れ立って行き、踊った。

私は麻雀、ボーリングはやらなかったが、早朝ボーリング(波多江、松村など)や徹夜でマージャンをするグループもあった。

その他、私はクラブ活動として、本学の舞踏研究会でしごかれ、社会人のフェロー・コーラスで歌っていたので、大忙しであった。

私達も、名画座2階でビリヤードを楽しんでいた。私達の楽しんでいたのは「四つ玉」であった。カッ・ンと強く玉を弾き跳ばす爽快感は、何物にも変え難かった。

何回か天文館の中町ビリヤードにも行ったが、そこでプレーしていたのが、田辺達のグループである。

遠目に彼らのプレーを見たが、超高度の頭脳プレーである「スリー・クッション」を目にした時の衝激は忘れられない。

私のクラスに、こんなに頭のいい男がいるんだ、と驚いたものだった。

四つ玉も何回か目にしたが、私達のものとは次元が異なり、永遠にプレーが続くので、面白くも何ともないものであった。

趣味は、下手なうちが楽しいという事を、その時に悟った。

左端でくつろいでいるのが、長老格の中村さんである。温厚な人柄で甲斐(元朗)、西畠と共にクラスの世話役であり、ホンダS6などを乗り回していた。

有馬の右隣にいるのが私(粟)である。

茶道部員であっただけあり、正座姿も自然体である。

私のやや右後方が美園である。

彼の家に遊びに行った事があるが、音楽の話で盛り上がり、御家族がピアノを弾くとかで、旅行先のザルツブルグで撮った、モーツァルトの生家等の写真を沢山もらった(今もとっている)。

その右が今隈である。私の真後ろの宇根と今隈は、共に神経内科に進んだ。今隈は、かなりのおしゃべり好きで、酒の席では、場を盛り上げてくれる。

その右の2人が、私達のクラスの紅二点、極めて貴重な存在である。

赤い服の下川夫人は、茶道部の中心部員で、茶会の折には、彼女の実家の竹やぶから、大きい孟宗竹を切り出し、茶席を設営した。

又、彼女は卓球部のエース・プレイヤーとしても活躍していた。

何らかの会の折には、名ホステスぶりを発揮してくれる。去年のクラス会でも、大島紬の和服姿で遠路からの参加者を、もてなしてくれた。

右端の福盛さんは、冷静で着実な茶道部の名キャプテンで、私達を指導し、卒業茶会を立派に成し遂げた。

以上で最前列の出席者の思い出のごく一部は述べた。後列の全員も皆、同様に個性(あく)の強い人たちであり、書き進めれば限りがないが、今回は割愛させていただく。

ただ、あと2人だけ書かせてほしい。

一人目は、有馬の後方にいる富永である。

彼もまた、茶道部で同じ釜のお茶を飲んだ仲間である(ここにはいないが、茶道部員は他に中山、村上がいる)。

彼と飲み会で、音楽の話をしている時の事であるが、彼が突然「ちあき なおみ」について熱く語り始めたのである。

普段の彼からは全く想像できなかった彼の姿、「ちあき」についてこんなに語れる人がいようとは、私も驚いたものであった。

彼の別の一面を見た思いが、胸に強く刺さった。

ちあきは、歌を歌うのではなく、歌で人生を語る事のできる稀有な歌手だと、私もずっと以前から思い続けており、数枚のLPとCDを折りに触れ聴いてきた。

私のお勧めのベスト盤は、「ちあきなおみ

大全集、黄昏のビギン、2CD」である。
特にこの全集の1枚目がいい（図4）。



図4 「ちあき なおみ大全集、黄昏のビギン」
吉田旺作詞の曲に泣かせる名曲が多い
カバー曲も歌に個性がある

レコード大賞受賞曲「喝采」の他、吉田旺作詞の曲に名曲が多い。泣かせる。

彼女はカバー曲でも、個性を込めて、自分の曲として歌いあげているので、何回聴いても各々全てを、新しい感動を以って聴く事ができる。

全く個人的な感想であるが、他の高名な歌手（私も大好きな歌手であるが）のカヴァー曲集も素晴らしいが、何回か聴くと、全てが同じような曲調で単調で、バック・グラウンド・ミュージックのようになってしまうが、ちあきの場合は、決してそのようにならない。

ちあきの才能と歌に対する姿勢であろう。

（繰り返すが、前記の感想は、個人的なもので、私も数枚のCDをよく聴いているし、彼の2曲のオリジナル曲は、名曲である）。

2人目は、右端に立っている古賀である。彼は宮崎出身で、大の釣り好き、釣り名人で、釣りに掛ける執念は尋常ではなかった。

彼は、「医学部つり同好会」の会長で、日曜ともなれば、私達を黒屋の車で、鹿児島、宮崎の各地に連れ回した。

最も度々行ったのが、吹上浜の遠投によるキス釣りで、雄大な東シナ海の彼方に真赤な夕陽が没もうとする中、力いっぱい遠投する醍醐味は忘れられない（その数年後、同地で2人が白い高速艇で連れ去られた。一日も早い帰還を望む）。

その他、大淀川上流の溪流での鮎の友釣りや、屋久島での磯釣りなど、思い出は尽きない。

図5は、この会での、私の祝辞の写真である。私と有馬は、専門に入ってから4年間、5人一組のポリクリ・グループとして、いつも一緒に勉強(?)した仲である。

グループの5人は、青沼、安部、有馬、栗、池田である。

この祝辞で、何をしゃべったか覚えていないが、何をしゃべったかは分かる。

私達のグループは、いつもポリクリで先生に怒られていたので、その思い出をしゃべったのだろう。

最悪は、耳鼻科で、「お前達のグループはなっちょらん。最低だ。もう教えん」と先生が本気で怒って、出て行った事もあった。

頼りの綱の有馬君は一見、コツコツ勉強するタイプのように見えたが、意外にもものんびり屋で、我々と大差なかった(?)。

「僕達のグループは、いつも怒られていたねエ」というのは、彼の口ぐせである。

ただ各科の最終テストでは、5人共、極めて優秀な成績(?)でパスした事は、つけ

加えておいていいだろう。

生理学では、英文の最新の小脳のプルキンエ細胞の働きに関する論文を論み、グループで検討し、各自レポート提出するものであった。一人ずつ呼ばれた返却時の、「君のレポートはすごいね。君は期末テストを受ける必要はないよ」との、生真面目でいかにも学者肌の橋村先生のコメントに驚いたものであった（でもテストは受けました）。

私達のグループは、教科書の暗記的なも

のは、好きではなかったが、論文を読み、自分の頭で内容を再構築し、自分の言葉でまとめあげる、というような考える勉強が好きだったし、基礎医学の橋村先生も、そのようなレポートを期待していたのだろう、とここでは書き残しておこう。

以上の他に、2枚のバラの写真がアルバムに挟んであった（図6、7）。

図6の橋口、下川の2人は、徹夜マージャ



図5 自称大親友の有馬くんに祝辞を述べる筆者



図6 医師会で活躍中の橋口、下川 他

ン派の代表格だったと記憶しているが、卒業してからは、積極的に医師会活動に参加・貢献している。中央は大園(?)。

下川は、西医体テニスのスター・プレイヤーだったが、肝腎の所で足がつり、退場したと言う話は、よく聞いていた。

図7は、茶道部の3人が写っている。

口にもものをくわえている私の右側が、茶道部キャプテンの福盛さん、後方の村上(岡部)の3人が茶道部。

それに、上別府、川平、梅林である。

繰り返しになるが、私達49年卒クラスの特徴は、一期・二期校時代の関係で、県外者が多分多く、鹿児島県出身者は17名と少なく、女性は鹿児島出身の2名のみだった。

世話役は、中村(雅弘)、甲斐(元朗)、西畠君、下川さん(その他にもいると思います)らで、写真係は常に皆越君です。

これらの皆様の努力に感謝したい。

私の知る限り、49年卒業生のうち、中村雅弘、甲斐元朗、針宮博志(彼は大分県立上野丘高校の唯一の同級生で、都城で死去)、土田文雄、大山崇の諸君が残念ながら鬼籍に入られた。

御冥福を祈りたい。(合掌)

学生時代から親しい同級生は、呼び捨てだったが、卒後50余年を経過した今回、異和感を覚えつつも、児玉君の意見に従い、基本、呼び捨てで名前を記載した。

同級生の連帯感、特権として御容赦願いたい。

今後、顔と名前が一致しなくなるかもしれないし、パッと名前がでなくなるかもしれない。

そうならないよう、また会いましょう。

そして、「北辰斜めに」を大声で歌おう。

西畠、甲斐俊朗君の「巻頭言」を付けて。

(付録) 図3で、説明の無かった出席者の御芳名

最後列左側より: 皆越、下川、米良、立野、米沢、小牧、松岡、上別府、押領司、花田、岡元、古賀。

最後列前、ピラミッド型の頂点より前方へ、左より: 西畠、波多江、富永、吉永、永迫、前田、大山、宇根、美園。

(おわり)

(追伸)

今回、本稿で述べたのは、同級生の一部にすぎない。また資料が出てくれば、追加して報告したい。



図7 医学部茶道部の3人、福盛、村上、栗と上別府、川平、梅林